

「資本論」全三部を読む（第二冊）（不破哲三）より

（今までの学習 第一編 商品と貨幣 第一章 商品 第二章 交換過程 第三章 貨幣
または商品流通 第四章 貨幣の資本への転化）

第三篇 絶対的剰余価値に生産

第五章 労働過程と価値増殖過程

第一節 労働過程

マルクスの労働賛歌

・労働の定義 「人間と自然との間の一過程、すなわち人間が自然とその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である」

・資本論発行後10年してエンゲルスが「自然の弁証法」の序論として書いた「サルがヒトになることに労働はどう関与したか」がこの労働について参考になる。

労働対象と労働手段

・労働手段の定義 「労働手段とは、労働者が自分と労働対象との間に持ち込んで、この対象に対する彼の能動活動の導体として彼の為に役立つ、一つの物または諸仏の複合体である」

・「生産手段」は生産物の立場から見た概念

・「生産手段」＝労働対象＋労働手段

第二節 価値増殖過程

・“ついに貨幣は資本に転化した”

・科学的社会主義の核心がここに

「マルクスによる「剰余価値」の謎の解決は、経済学上の業績というにとどまらず、科学的社会主義の理論の全体にとって「最も画期的な功績」（エンゲルス反デューリング論）となった。

第六章 不変資本と可変資本

・生産物＝（不変資本 c と可変資本 v ＝資本 C ）＋剰余価値 m

・「労働の二重性」

どんな労働も目的とする使用価値を的確に作り出す具体的有用的労働という側面と全ての商品に共通する価値を作り出す抽象的人間労働という側面を持っている。

第七章 剰余価値率

・剰余価値率 $(m/v) = \text{剰余労働時間} / \text{必要労働時間} = m / (c + v)$ ではない

マルクスに詳しいデータを供給してくれた「マンチェスターの一工場主」はエンゲルス

・シーニアの「最後の一時間説」

資本家は最後の一時間で利益を出しているか？

次回は第八章 労働日 以上